

「草間彌生わたし大好き」

上映に寄せて

上原 誠勇

草間彌生のドキュメンタリー映画がいよいよ沖縄にやってくる。水玉もよりの派手な衣服に身を包み、真っ赤な頭髮のカツラをした、あのギョロ目の女性前衛美術家だ。来年八十歳を迎える草間はバリバリの現役。とても信じられないほど精力的に制作し、世界の現代美術シーンで活躍中である。

この度公開される映画「三(二)アイコール」草間彌生わたし大好き」は、草間のアトリエにカメラが入り、日常風景や制作過程、創作の周辺を密着取材している。草間芸術の根幹となっている強迫観念や「生」と「死」、「愛」と「家族」について語り、出自と自身の芸術との関係、未来などについて本人の語りで、草間芸術の神髄が浮き彫りにされる。八十歳のオバーちゃん(失礼!)が、少女のように素直に

も、きつと元気をもらい草間ファンになるだろう。

語りだす口調には、永遠の「少女性」の美しさや、愛おしさがあふれ、思わず抱きしめたい衝動に駆られる。

「晩年に」とインタビューアが制作中の草間に訊き出す印象深いシーンがある、「晩年?

感覚知性の芸術ワールド

専門誌や多くのメディアで紹介されているので、読者もよく知っていることだろう。また、鏡を多く使用したインスタレーションの草間独特の自己喪失的な幻想空間や巨大オブジェを美術館などで体験された方もいるだろう。

少女時代から画家を志している。二十九歳で単身ニューヨークへ渡ったのが五八年のことである。ベトナム反戦パフォーマンス、当時の美術家やヒッピーとの交流など、エピソードが多い。七〇年一時帰国時の某TV局でのハレンチ事件、万博ホモセクシュアルパレード事件、銀座、皇居前広場ヌードパフォーマンスなども有名だ。

七三年、ニューヨークのアトリエを引き揚げ帰国した四十三歳の草間だったが、日本の美術界の関心は薄かった。七〇年代後半には小説も書き、版画も出版するが存在は目立ってなかった。しかし、九〇年のバブル経済崩壊後の荒れ果てた地平に、地の底から強い生命感をみなぎらせて登場した草間芸術は、九三年にベネチアビエンナーレの日本代表として参加し、世界的な再評価を得た。

誰が、わたし晩年?と素直に意に解せない表情を見せる。歳なんか関係ない、そんなこと聞かないでね、少女のように優しいトーンで応える。「この年になってようやく自分の力でモノが見えるようになった」と語る。草間にとって、まだ旅の途中である。天才芸術家、草間彌生の感覚知性が進化してゆく姿が見える映画である。この映画を観た人は草間芸術を知らずと

環境にあり、草花の絵を描き、

それまで、現代美術は西洋の弁証法的手法において文脈が語られ、その枠にはまらない美術表現は評価の外にあった。しかし、草間作品は女性生理性や、身体性、その独自の感覚から生み出された「感覚の知性」を提示し、世界の美術シーンに衝撃をあたえた。以後、今日に至る草間の芸術活動と作品は世界的に広く知られ、世界のKUSA MAとなった。かつて六〇年代のニューヨークアートシーンに東洋の魔女として君臨した草間。半世紀後の今日、草間ワールドは十代の若い女性たちから

「カワイイ」と共感を呼び、不死鳥のように羽ばたき輝いている。

(画廊主)

映画「草間彌生わたし大好き」は26日―8月1日、桜坂劇場で上映。前売り1200円、当日一般1600円。25日午後3時30分、午後7時は県立博物館・美術館で特別先行上映。午後3時30分の回終了後、上原誠勇氏(画廊沖縄)、前田比呂也氏(県立博物館・美術館)、真喜屋力氏(桜坂劇場)によるトークショー。問い合わせは電話

098(860)9555。